

平成7年豪雨災害の記憶をつなぐ防災教育

～2年間の保小中合同避難訓練を通して～

長野県小谷村立小谷中学校

校長 出口 哲朗

1 はじめに ～小谷村と災害～

小谷村は、県の最北西部に位置し、中部山岳、妙高戸隠連山に囲まれた静かな山里である。村の中央を南北に縦断して流れる姫川は、白馬村佐野坂に源を発し、飛驒山脈等を水源とする土砂流出の激しい急流支川と合流しながら北上し、日本海に注いでいる。姫川東側の山地は「糸魚川～静岡構造線」の活動の影響を受けた地層が褶曲し、断層によって切られ、地滑り地が密集している。また、日本屈指の豪雪地帯であり、湖沼や湿原が点在し、豊富な地下水による大規模な山崩れの危険性を秘めた地域である。

近年では、平成26年(2014年)の神城断層地震において最大震度6弱の揺れが村を襲い、全壊33棟の住家被害をはじめ、地滑り8ヶ所、土石流5ヶ所と多くの被害に遭った。

このように、古くから地滑り、鉄砲水、土石流、台風、洪水、雪崩等に見舞われた災害多発地域であり、「山崩れを防いだ八幡様」「大雪崩を防いだ腕無し地藏」等、災害に関する信仰や諺、言い伝えも多く残る地域である。

2 研究のねらい

災害多発地域に暮らす生徒にとって、防災学習は自らの安全を確保するため必要不可欠であり、学校は地域に応じた具体的な防災教育を展開する義務があると考えられる。

本研究は、地域の過去の災害を知り、自分なりの言葉で伝えることを通して、災害に対する的確な思考・判断に基づく適切な意思決定や行動選択ができる力、自分や家族の安全を確保するための日常的な備えができる力、地域社会の安全活動に進んで参加・協力・貢献できる力の育成を願った防災教育のあり方について一考を投じたい。

なお、地域災害の中で扱った事例(教材)は、現在の生徒が生まれる前に起こった平成7年(1995年)7月豪雨災害とした。

なぜなら、地域固有の自然災害(河川氾濫、地滑り、土石流)であるとともに、復旧に長年の時間を

要したことに加えて、当時の村の人々の願いや行動に想いを寄せて、人的被害がなかったことを誇りに感じながら、これからも教訓として伝えてほしいと願ったからに他ならない。

表1 平成7年(1995年)7月豪雨災害の概要

- 平成7年7月11日から12日にかけて、新潟県との県境山岳地帯に梅雨前線が停滞し、大北地区に記録的な集中豪雨が発生した。
- 一級河川である姫川・関川・黒部川が氾濫。地域住民の直接的被害は少なかったが、避難者多数。道路や鉄道のインフラが復旧するのに数年を要する被害が出た。
- 2021年には、この災害が日本海からの暖かく湿った空気が山岳地形に流れ込み積乱雲が次々に発生した「線状降水帯」の可能性が示唆されている。



3 研究経過と内容

(1) 保小中合同避難訓練・引き渡し訓練

小谷村では、保育園、小学校、中学校の15年間を見通した一貫型教育を進めるため、保小中合同職員会議を設置し、様々な研修や取組を実施している。令和2年度には交流活動・交流学习部会が新設され、「合同避難訓練・引き渡し訓練」についての検討をはじめたが、コロナ禍ゆえ感染症を危惧し、令和3年度は合同避難訓練に留まり、令和4年度については、感染状況を鑑みながら合同の引き渡し訓練まで実施するに至った。

実施にあたり、「合同避難訓練・引き渡し訓練マニュアル」を整備した。村教育長と各校園長の伝達経路や避難所となる小学校への移動方法を確認したり、誘導、引き渡し、救護等の係分担や配置を検討したりした。なかでも、兄弟姉妹が掌握できる引き渡し名簿の作成と迎えに来る保護者の動線を考えることには苦勞した。



表2 合同避難訓練・引き渡し訓練職員反省

- 子どもの居場所が分かる表示札や行き帰りの動線を確保したことで混乱なくできた。保育園にはオムツやパンツの子がいる中、待機場所をトイレ近くにしていただきありがたかった。(保育園職員)
- 今回、二次避難の移動は円滑に行えたが、積雪期には、2台あるバギーに未満児を乗せて移動することは車輪が動かず難しい。冬期間の移動について検討する必要性を強く感じる訓練になった。(保育園職員)
- 保育園児と中学生は体育館内を靴下で行動していたが、災害時は床に瓦礫が散乱しているため、内履きを履いたまま避難した方が良い。(小学校職員)
- 生徒・職員とも緊張感をもち訓練していた。リアリティを求めれば、余震を想定した二次避難の情報を伝えつつ行動を起こすことで、その判断基準を各校園長と教育長による意思疎通が必要。(中学校職員)
- 長時間待たされていた子どもも落ち着いて取り組んでいたのは、職員の支援あってと感じた。心配していた保護者の車両の流れもスムーズで、校舎内の引き渡しも良い。来年度以降は、地域の安心安全の家を確認したり、非常食体験や簡易段ボールベッド体験をしたりするのもよい。(中学校職員)

ほとんどの職員が初めて経験する合同での訓練であったが、概ね計画通りできたと評価している。また、実際にやってみて初めて分かったことが反省に挙げられていたが、次年度以降の改善に向けた収穫と捉えた

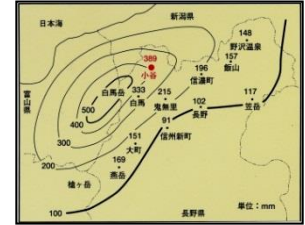
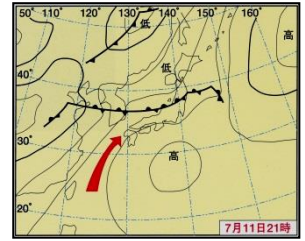
い。さらに、実際の災害時における引き渡しの判断は、道路状況も含め、帰宅後もライフラインが確保されていることが前提なので、教育委員会を経由して村総務課（災害時は危機管理対策部）と情報共有できる仕組みづくりについて協議していきたい。いずれにしても、被災変時の生徒・職員の安全確保は校長判断が最優先になるが、行政との事前の意思疎通が重要な判断材料の一つとなると考えるからだ。

(2) 保小中合同避難訓練・防災学習発表会

令和5年度には保小中合同避難訓練は実施するが、引き渡し訓練は3年に1回実施することとした。

なぜなら、令和4年度実施により、多くの保護者・教職員が一定のノウハウを身に付けたことからマンネリ化の防止を図るとともに、もっと生徒が主体的に学ぶ防災教育への展開を図りたかったからだ。

そこで、本校3年生が挑む総合テスト理科の出題分野「気象のしくみと天気の変化(2年次)」における復習を兼ねた日本の四季の特徴や平成7年豪雨災害における天気図等の見方を端緒に、災害を経験した地域の方から被害の様子や避難生活等、当時の状況を学ぶことから防災学習が始まった。



① 防災学習①【ビデオ視聴、講演会】

ビデオ「平成7年7月11日 梅雨前線豪雨災害の記録」を視聴後、小谷村関芳明教育長（当時は水道課職員）から当時の様子をお話いただいた。



ビデオを視聴しながら、普段、通学に使っている道路や橋が崩壊している様子を目の当たりにした生徒たちは、思わず嘆息が漏れ言葉を失った。

関教育長からは、「厚い雲が2、3日空に留まり、村全体に大雨と土砂崩れが起こり、役場の電話が鳴りっぱなしだった」「中土に住む老夫婦を負って救助した」「多くの施設が被災し復旧に苦労した」「今でも雨が強く降ると当時を思い出し、怖さを覚える」等の話を聞くことで、生徒たちは、避難生活の様子や復旧への道のり等、被災当時の話をもっと詳しく知りたいという願いをもった。

また、近年各地で多発するゲリラ豪雨や線状降水帯による水害に思いを馳せると、28年前の災害の話に留まらず、災害への備えはどうあるべきか、地域の課題や自分ごととして考えるようになっていった。

表3 防災学習①【ビデオ視聴、講演会】における生徒の感想

- 平成7年の災害は聞いてはいたが、ビデオを見て広い地域で被害があったことや、川の氾濫だけでなく山の土砂崩れもあったことを知ってとても驚いた。
- 自分の家をはじめ村中で大きな被害があったことにびっくりした。今はきれいな村だけど、災害時にはたくさんの土砂、石、木等に埋め尽くされていた。当時の人の頑張りが今に現れていると思う。
- 人的被害がなかったのは奇跡だと思った。孤立した家は買い物とか難しかったと思う。
- 家に土砂が流れ込んだり、道路がなくなったり、大きな被害だったことが分かった。避難所の生活や孤立した生活は大変だったと思う。
看護師さんが歩いて訪問してくれたことは、大きな安心になったと思う。復旧に向けての団結力がすごいと思った。
- 村の人々が、まず自分からできることをやった結果、大糸線が復旧できたと思う。互いに助け合うことで、絆も深まったのだと思う。私たちも「助け合い」と「自分から」を大切にしていきたい。

② 防災学習②【災害に関わった方による座談会】

平成7年豪雨災害の被災状況やその復興をより深く学びたいと願う生徒たちに、当時、災害に関わった方々による座談会を計画した。講師には、「当時の記憶で一番印象に残っていること」「災害時や、災害後、一番大変だったこと」「避難生活の様子や小中学生の様子」「復興に要した年月」など、事前に生徒が関心をもつ出来事について焦点を絞ってお話いただくよう事前をお願いした。

上川 喜一さん（当時 役場総務課防災担当）からは、避難所の設置・運営、不足する物資の供給計画等のお話をいただいた。また、吉岡 久人さん（当時 消防署職員）から、護岸作業や要救助者の救助の様子を、松澤 敬子さん（当時 小谷村診療所看護師）から、避難所の衛生管理や救護者の手当をはじめ、高齢者宅への訪問診療などのお話をいただいた。

さらに、今井 頌治さん（当時 今井工務店社員）からは、苛酷な災害復旧現場と翌年の蒲原沢土石流災害の悲劇（14名の作業者が亡くなる）から、人間が立ち入ることができない危険な作業現場において、大型作業機械を遠隔操作で作業を行う「無人化施行」を全国に先駆けてきたことも教えていただいた。

講師一人ひとりの歴史に触れた生徒たちは、食い入るように話を聞き、メモを取りながら、質問をしていた。

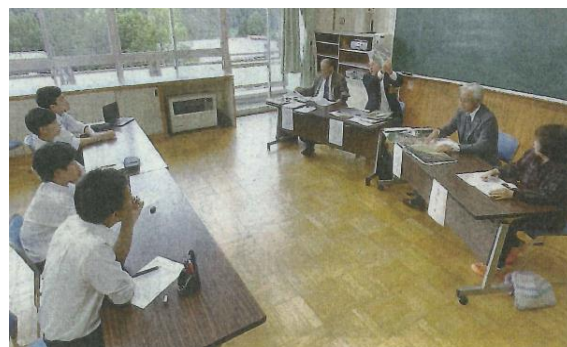


表4 防災学習②【座談会】における生徒の感想

- 当時の写真から、道路が崩れ、沢がV字型になり、田畑が水で埋もれていることが分かり、こんな大災害にあったと思うと怖い。避難している人も、家を離れ、食料も十分でなかったことを知り、大変だったことが伝わった。他人事とは思わず、いつ災害が来てもおかしくないなので、できる限りの対策をしたいと思います。
- 昼の2時で明るい時間帯なのに、「外が真っ暗になっていた」の話が衝撃的だった。皆さんそれぞれが村の復旧のために努力したり、避難先で頑張ったりしたことが分かって良かった。
- 米はあるのに水がない時、「プールの水を使おう」の発想にびっくりした。住民の工夫や団結力が死者ゼロにつながったのだろうと思った。
- ヘリコプターでの物資供給や、連絡手段に無線を使う中、高齢者の常備薬確保が一番困難だったことや、短い道路の復旧工事でも1ヶ月もかかることから、災害対応や復旧のあり方も考えなければならぬ。

③ 防災学習発表会準備

座談会の講師から、「豪雨災害の記憶を風化させてはならない」の発言を受け、自分たちの学習成果を後輩に伝えることにより強い意義を感じとった生徒たちは、年代に応じて伝えたい内容とそれに見合う写真・図表等を選び、A2版のパネルを使った紙芝居形式にまとめていった。

また、話し方を選んだり、飽きさせないように一部をクイズ形式にしたりするなど、グループで工夫しながら活動を進めていった。発表練習では、仲間からアドバイスをもらったり、タブレットで録画して振り返ったりもした。

繰り返し練習をするなかで、「体験していないことを伝えるのは難しいが、自分ならどうすべきかを考えられるような発表にしたい」「今の小谷村があるのは、災害時に復旧に携わった人たちが頑張ってくれたおかげで、犠牲者がなかったのは、人々の協力のおかげであること。行動することに意味があることを伝えたい」「午後2時に空が真っ暗だったということから、異変を感じたときには用心すること。自分の命は自分で守ることを伝えたい」と、一人ひとりが特に伝えたいことが願いへと膨らんでいった。



④ 保小中合同避難訓練・防災学習発表会

地震を想定し、小谷保育園、小谷小学校、そして本校が、それぞれの避難マニュアルに基づき一次避難をした。その後、各校園長と教育長が報告し、教育長の指示により指定避難所の小谷小学校へ二次避難を開始した。

小雨が降る中、小学校体育館まで10分程度歩みを進めて二次避難を完了した。昨年度に引き続き2回目の訓練ということもあり、生徒・職員とも迅速に行動することができた。訓練後の休み時間に、3年生が「傘を差しての避難の可否」について、話し合っていた。「緊急に避難を要する場合は、傘を差さずに走って逃げる」に対して、「避難所での生活を考

えると健康被害のリスクを避けるため、傘を差して逃げる」の意見が出されていた。災害時における行動に絶対無比の正解はなく、その場その場での判断と行動が必要になる。日頃から様々な場面を想定することの大切さを感じとっている生徒を頼もしく感じた。



続く、「防災学習発表会」は、保育園を年長・年中と年少・未満児の2グループに、小学校を低、中、高学年と3グループに、中学校を1・2年の1グループ、計6グループに分けて体育館の各所にブースを設けて行った。

保育園グループは、子どもの目の高さに合わせてパネルをかざし、ゆっくりと丁寧な口調で話すことを心がけていた。小学生グループは、たくさんの質問を一旦受け止めながら、「皆さんなら、どうしたと思いますか」と予想させながら、当時の人がとった行動の説明をしていた。



逆さまになったガソリンスタンドや水没する老人ホームや倒壊する近所の建物の写真を見て驚きの声を上げる園児や児童。社会見学で訪ねた砂防事務所と関連づけて質問をする児童。土砂災害の恐ろしさを感じに述べる児童。地域の人々の助け合いによって行方不明者や死者が出なかったことに感嘆する児童。地域の過去の災害を伝える学習は、年齢差を越えて地域で暮らす全員の課題として位置付いた時間となった。



その後、「まとめの会」における校長講話では、東日本大震災において、岩手県釜石市の鶴住居小学校と釜石東中学校の児童・生徒約 570 人が全員無事に避難することができた「釜石の奇跡」が、日頃からの防災訓練の結果であり、私たちと同じように毎年、合同避難訓練を実施していたことについて触れた。そして、「小谷の奇跡」という災害は起こってほしくないが、「いざという時、自分の命を守るため、どのように行動するのか？」訓練を振り返るとともに、仲間や先生方、家族とも話し合うよう呼びかけた。

表5 合同避難訓練・防災学習発表会における小学生アンケート結果

① 小谷村に豪雨災害があったことを知っていましたか	
知っていた	37.1%
知らなかった	62.9%
② 中学生の発表は分かりやすかったですか	
そう思う	92.8%
どちらかと言えばそう思う	7.2%
③ 小谷村にあった災害についてもっと知りたいですか	
そう思う	63.9%
どちらかと言えばそう思う	30.9%
どちらかと言えばそう思わない	3.1%
そう思わない	2.1%
④ あなたの家族は、地震や大雨があった時のことについて、よく話し合っていますか	
そう思う	19.4%
どちらかと言えばそう思う	45.9%
どちらかと言えばそう思わない	21.4%
そう思わない	13.3%
⑤ 学校で避難訓練をすることは大切だと思いますか	
そう思う	91.8%
どちらかと言えばそう思う	8.2%

小学校児童 98 名のアンケート結果から、半数以上の児童が平成 7 年豪雨災害を初めて知ったことが分かった。また、中学生の発表については、ほとんどの児童が分かりやすかったと回答し、話し方を工夫したことや写真や図を効果的に使ったことが評価された。

さらに、「小谷村にあった災害についてもっと知りたいですか」の質問に 95% 近くの児童が肯定的な回答をしており、地域災害への関心が高まるとともに、防災や減災への意識が芽生えるきっかけになったと考える。

一方で、学校における避難訓練の意義を十分に感じとってはいるが、「あなたの家族は、地震や大雨があった時のことについて、よく話し合っていますか」の質問に、「そう思う 19.4%」「どちらかと言えばそ

うと思う 45.9%」に留まっている。今回の防災学習発表会が、過去の地域災害や、災害時にとるべき行動等について家庭で話題に上るきっかけになればと願う。また、今後も学校における防災教育の意義や実践と成果を家庭に周知していく必要性を改めて感じる結果となった。

表6 合同避難訓練・防災学習発表会における職員の見解

- 3 年生の発表が子どもたちの心に響いて、みんな真剣に聞いていたのが印象的でした。発表した生徒にとってもいい経験になると感じた。今後も繋げてほしい活動です。(保育園職員)
- 対象児童を考えた話し方や示し方、受け応え、問いかけで、嬉しい成長ぶりでした。来年度以降も 3 年生のプレゼンを位置づけたい。(小学校職員)
- 自分たちの住む地域でどんな災害が起こり得るのか、想像できた説明でした。(小学校職員)
- 現実社会に自分の学びが活かされる機会だった。中学生が年少の子どもたちと関わる意義を感じた。パネルはグループごとに使う順序が異なり、話す言葉も相手意識を感じた。M 生は、保育園児に「〇〇の時はね」「〇〇はどう思う？」と問いかけながら話していた。園児も児童も一生懸命聞いてくれるので、3 年生も嬉しかっただろうし、自己肯定感が高まる瞬間だったと思う。保小中の連携とはこのことだと納得した。(中学校職員)
- 平成 7 年豪雨災害は、地域にとって風化してはいけない災害。中学 3 年生が語り部となり伝えることで、家庭や地域で考えるきっかけとなる。来年度は、非常食を食べたり、段ボールベッドを使ってみたりする避難所体験も考えられる。(中学校職員)

4 研究の成果と今後の課題

防災教育は、様々な危険から自分や周囲の人の安全を確保する教育である一方、防災教育を通して、教科学習に関連する資質・能力を高めると同時に、地域理解やキャリア教育にもつながることが明らかになった。以下に本研究の成果と今後の課題について述べる。

(1) 研究の成果

- ① 地域固有の災害についての知識が身についた
季節風の影響を受ける日本海に面した山岳地域である小谷村固有の自然環境は、河川氾濫や土砂災害

が他の地域より警戒しなければならないと感じた生徒が多く、地域固有の災害に対する知識が身についた。

② 地域の人々に愛着と誇りの念が深まった

災害時、様々な立場で関わった地域の方々の話を聞くことで、先人たちへの畏敬と感謝の念が培われるとともに、災害多発地域に暮らす自分たちが、これからどのように地域社会に貢献できるか自身に問う学習になった。

③ 発表する学習課程（伝承）は深い学びにつながった

自分たちが学習した内容を保育園児や小学生に発表する学習課程を設けたことで、さらに深く調べていこうとする態度の育成につながった。また、どうやったらうまく伝わるか、相手意識をもつことで、伝える内容や言葉を選んだり、例示を挙げて説明したりするなど、表現活動の工夫につながった。

(2) 今後の課題

① 土砂災害を想定した垂直避難

小谷村防災マップでは、本校裏山が〔(急傾斜・土石流) 土砂災害特別警戒区域〕にあたるため、校舎西側半分が、〔(急傾斜・土石流) 土砂災害警戒区域〕に指定されている。これまでの避難訓練では、火災、地震を想定した訓練が多かったが、土砂災害を想定した訓練がなかった。そこで、2月には土砂災害を想定した「垂直避難」の訓練を計画している。

具体的には、地震発生による土砂災害警報が発令を受け、緊急避難として本校最上階の3階中央部に位置する社会科教室に全校生徒が一次避難する。その後、安全を確認しながら、指定避難所である小谷小学校へ「水平避難」をするものである。また、事前予告なしの休み時間の時間帯で、停電による放送機器が使用不可の状況の中、メガホンで避難指示をする。さらに、校長・教頭が出張不在で、携帯電話で報告と指示を行う。

② 発達段階に応じた計画的な防災教育

防災教育は避難訓練のみに行われるものではなく、小谷村における防災教育の一層の充実を図るため、今後は、各校園で実施している防災教育を教育活動全体で見直し、教科横断的な視点（カリキュラム・マネジメント）で再編成したい。また、保小中の発達段階に応じた15年間における一貫したカリキュラムを作成したい。

5 おわりに ～VUCA時代を生き抜く生徒に～

令和6年1月1日、能登半島で巨大地震が発生し、死者数200名を超える大惨事となっている。1週間後、3学期を迎えた本校生徒会長は、生徒集会にて「被災者に自分たちは何ができるのか話し合ってみよう」と提言した。その後、能登半島地震のニュースを視聴し熟議した結果、募金活動をする事となった。

表7 第1回生徒集会における生徒会長の提言

今回は令和6年能登半島地震について知り、自分たちにできることを考えたいと思います。本当は、新生徒会最初の生徒集会のため、新しい委員会での具体的な目標やアドバイスなどを話し合おうと思っていましたが、新年早々、死者数が200人を越える能登半島地震という大きな災害が起きてしまいました。

もし、急に自分の周りから、大切な友達や家族がいなくなってしまうと考えるだけでも苦しくなってしまうかもしれません。幸いにも、被害に遭わずにすんだ方もいらっしゃると思いますが、その方の仲の良かった友だち、いつも挨拶を交わす近所のおばあちゃん、大切な家族などを急に失い、苦しんでいる人がいます。

そこで、校内の一人ひとりの良さを認め、大切にすることはだけでなく、日本や世界全体の一人ひとりを大切にするためにも、私たちに何かできることはないのか話し合ってみようと考えました。

(小谷中学校第46期生徒会 会長による提言)



防災教育を通して生徒の防災に対する考えは自分や家族から地域社会へ、さらに広い視野で考えられるようになってきていることを実感し、今後も防災教育を視点にした人間形成を図っていくことを決意し、本研究の報告を終える。

(執筆責任者 令和5年度 校長 出口 哲朗)